

# 鹿の歌

——秋艸道人鹿鳴歌私注——

山 崎 馨

秋艸道人會津八一には、『鹿鳴集』巻頭の七首をはじめとして、鹿を詠んだ多数の歌がある。それが歌集の名とふかくかかすることは、道人自身の言によつて明らかである。私の歌集には、奈良の歌ばかりでもないが、だいたい其の方角のものが多く、それに因んで『鹿鳴集』とした。

これは『渾齋隨筆』所収の「鹿の歌二首」の冒頭であるが、その末尾には首尾を照応させて、鹿の声が

そのまま人の心に強く沁み入る。あんな調子で人間の歌も詠めないものであらうかと、つくづく思ふこともある。かう考へると、『鹿鳴集』とは、私の集の名としては、少し不似合なほどに出来過ぎてゐるのかも知れない。と述べてゐる。この自負さながらに、道人の鹿の歌には佳作が多い。本稿はその鹿の歌十四首に私注を施すことを目

的とし、まづ鹿鳴の歌四首について考へることとする。

をじか なく ふるき みやこ の さむき よを  
いへ は おもはず いにしへ おもふ に

この歌は『鹿鳴集』の「南京新唱」に見え、詞書に「奈良の宿にて」とある。道人はこの詞書に自注して

作者は明治四十一年（一九〇八）の第一遊には、東大寺転害門外の「対山楼」といふに宿れりしも、その後は登大路町の「日吉館」を常宿とす。

と言ふ。女主人田村キヨノさんの人柄にひかれて、日吉館を愛好した学者藝術家の数は、旅館として本邦第一と言はれるほどの多数にほり、日吉館は「奈良の藝術院」と呼ばれるやうにもなつた。その顔ぶれは、中村喜代次氏の「秋

艸道人會津八一先生」(同人誌「ペン友」第十一号、平成六年四月)によれば、概略左記の如くである。

會津八一	青野季吉	阿部知二
芥川比呂志	天沼俊一	荒井 寛
安藤更正	石井鶴三	板橋倫行
上野直明	宇野浩二	亀井勝一郎
喜多貞吉	小林 剛	小林秀雄
西條八十	西東三鬼	志賀直哉
杉本健吉	鈴木信太郎	竹田道太郎
谷川徹三	高田 保	鷹司平通
丹下健三	土門 拳	東野英治郎
西川 寧	野間仁根	野間清六
裕伊之助	服部 正	広津和郎
久松潜一	堀 辰雄	正宗得三郎
松田権六	宮川寅雄	三上次男
三好達治	水原秋桜子	料治熊太
和田信賢	和辻哲郎	

かうした宿泊客のなかにあつて、日吉館と最もふかい縁を結んだ人は秋艸道人會津八一であり、『鹿鳴集』『山光集』などの数々の歌も、日吉館に宿る日々に生れたのである。その日吉館は、平成七年(一九九五)六月、愛惜の声に包

まれながら、八十年に及ぶ歴史の幕を閉じた。

遠つ代の奈良の都のことを、あれこれと思ふにつけても、その「ふるきみやこ」に寄せる慕はしさが募るばかりで、わが家を思ふこともない。いま奈良の寒い夜に牡鹿の哀切な声が流れて、古京を思ふ悲しみをふかくするのであつた。結句は万葉集の人麻呂の作

阿騎の野に宿る旅人うち靡き眠も寝らめやまいにしへ思ふに

にも見えるが、道人は現代の鹿鳴を背景として異なる歌境にそれを活用してゐる。

かすがの の よ を さむみ か も さをしかの  
ま ち の ちまた を なき わたり ゆく

これは『鹿鳴集』の「南京余唱」に見え、詞書に「奈良のやどりにて」とあつて、日吉館に想を得た歌である。前掲の自注の表現によれば、道人は第一回の奈良旅行では対山楼に投宿し、第二回以後は日吉館を常宿としたやうに見える。しかし道人の年譜によれば、奈良旅行の第二回は大正元年(一九一三)八月であり、第三回は大正九年(一九二〇)十二月であつて、そのいづれについても投宿した旅

館を特定することができない。第四回は大正十年八月で吉澤屋泊、道人の名がはじめて日吉館の宿帳に現れるのは、大正十年十月二十二日のことで、第五回の奈良旅行に道人と日吉館との出会ひがあつたと考へられる。「南京余唱」は大正十四年の産であるから、この詞書における「奈良のやどり」が日吉館であつたことを知るのである。「南京新唱」は明治四十一年から大正十三年に及ぶ歌群であり、前歌「をじかなく」はその末尾に近く位置してゐるので、それをおそらく大正十三年一月の奈良旅行の産であらうと推定することができる。すなはち、右二首の詞書における「奈良の宿」「奈良のやどり」は、いづれも日吉館をさすものと理解される。

かうして、道人との因縁浅からざる日吉館の東庭に、この歌を刻んだ歌碑がある。昭和四十九年四月八日除幕、奈良における道人の歌碑としては第十基であつた。この歌を刻んだ歌碑は、平成三年（一九九一）に日吉館の西の小庭にも建立された。

島崎藤村の名作「千曲川旅情の歌」の第三節に  
暮れ行けば浅間も見えず

歌哀し佐久の草笛

といふところがある。この「佐久の草」における音の配列

は、仮名書きに改めると「の」をはさんで前後に「く」あり、さらにその前後に「さ」があつて、その音韻律の美しさが哀切な歌意に調和してゐる。この技法は道人の「ま・ち・の・ち・また」に見え、

あたらしき まちのちまたのきのひは  
かがよふはるをいつとかまたむ

（鹿鳴集「震余」）

かりすてしやなぎのえだのかにほふ  
まちのちまたのたそがるころ

（伐柳、昭和二十二年）

また左記の歌にも同様に見ることができる。

はつなつのかぜとなりぬとみほとけは  
をゆびのうれにほのしらすらし

（鹿鳴集「南京新唱」）

すみもちてかけるかまづかうつせみのわが  
ひたひがみにるといはずやも

（山光集「雁来紅」）

道人がこの技法を藤村の詩句に学んだのかどうかは明らかではないが、これはおそらく道人自身の調べであり、それがたまたま藤村の技法に一致したのであらう。道人と親交があつた料治熊太氏は、道人の歌について、

先生のお歌は、澄んだ歌とよく人に言われますが、歌は歌韻が大切だというのが、先生の御持論で、古語は使われたが、漢字書きなどは避けられていました。濁音などもなるべく避け、子音と母音の配列などもひと一倍気にされていたようでした。

〔短歌〕昭和四十三年十一月号)

と述べられた。道人の歌九百首を精査するならば、同様の技法をさらに見出すことができるかもしれない。

なほ、この歌については小著『會津八一の歌』七四―七八ページを参照されたい。道人と料治氏との親交については、右の料治氏の稿、小松正衛氏の「料治熊太さんと秋艸道人」(「小さな薈」一九九一年五月号―七月号、創樹社美術出版)、中村喜代次氏の「秋艸道人會津八一先生」(同人誌「ペン友」第十三号(平成七年四月)などに詳しい。

しか なきて かかる さびしき ゆふべ とも しら  
で ひとつす なら の まちびと

この歌も前歌に同じく大正十四年の「南京余唱」に見え、詞書に「鹿の鳴くをききて」とある。当時の奈良は、現代の喧騒からは推すべくもないほどの静けさに包まれてゐた

はずで、宮川寅雄『會津八一の世界』も「昭和初年のころの奈良は、現在にくらべると、隔世の感があるように閑静だった」と言ふ。その閑静な奈良の日暮れに鹿の声が聞えて、道人の旅愁はいよいよ深くなる。それを知らずに、その町に住む人々が点灯すると、ほの暗い電光が家々の窓から洩れて、道人はますます深くなる旅愁に沈むのであつた。鹿鳴とほの暗い灯火との相乗がもたらす旅人のさびしさは、その町に住み慣れた人々の日常と対比されることによつて、鮮明に描かれてゐる。

しか なきて なら は さびし と しる ひとつも  
わが もふ ごとく しる と いはめ や も

前歌の詞書「鹿の鳴くをききて」はこの歌にもかかる。大正十四年十一月の作である。鹿が鳴く奈良のさびしさをしみじみと知る旅人は、決してわたし一人ではないのであらうが、わたしが浸つてゐるさびしさと同じやうなさびしさを知る旅人は、はたしてあるのだらうか、あるはずもないのだ、と言ふのである。前歌には「しか」「しらで」と「し」の頭韻が見られたが、この歌においては「し」の音が一段とよく響いて、鹿鳴を軸として渦巻くやうな旅愁に

調和してゐる。道人が「ごとし」の用ゐ方に長じてゐたこと、それを専ら第四句に用ゐたことについては、すでに別稿「會津八一作歌私注」鹿鳴集における風の歌」（親和女子大学「親和国文」第二十六号）に述べた。就いて参照されたい。

右の二首はまさしく鹿鳴の歌であり、『鹿鳴集』と題する歌集に載せるべき歌として、最もふさはしいものであつた。然るに、昭和十五年（一九四〇）五月に創元社から刊行された『鹿鳴集』初印本においては、この二首が脱落してゐたのである。道人はこれを

まことに不注意のいたりであつた。

ほんとに不覚であつたと言はなければならぬ。

として、創元選書および創元文庫においてこれを追補した。この二首について道人みづからが述べるところを左に引いておく。

時は大正十年（十四年の誤り、山崎注）十一月、奈良客中のある日の夕暮を、嫩草山のわきから、宿に帰る途中に詠んだもので、歌集では『南京余唱』の後半に加へるべきものであつた。鹿の声はもとより淋しい。それに私の定宿のある登大路のあたりの夜はことに淋しい。しかしそれよりも、私の気持の方に、もつと淋しいものが

あつたのであらう。（『渾齋隨筆』の「鹿の歌一首」）

鹿の声が旅愁を誘ひ、それを増幅させることは、すでに万葉集に見えてゐる。天平八年、七三六年夏六月、阿倍継麻呂を大使とし、大伴三中将を副使とする遣新羅使の一行は、難波を出航した。予定が大きくおくれ、帰国するつもりでゐた秋の日々を、一行は北九州の岸辺に漂つてゐた。引津の亭（糸島半島の西岸、唐津湾の東岸）において大判官（副使に次ぐ三等官）壬生宇太磨が詠んだ歌、草枕旅を苦しみ恋ひをれば可也の山辺にさ男鹿鳴くも

（卷十五・三六七四）

ここでは背後の山から聞えてくる鹿の声が旅愁とふかく結びついてゐるし、また同行の人の歌にも鹿の声と旅愁とのかかはりは明らかである。

妹を思ひ眠の寝らえぬに秋の野にさ男鹿鳴きつ妻思ひかねて  
（卷十五・三六七八）

夜を長み眠の寝らえぬにあしひきの山彦響めさ男鹿鳴くも  
（卷十五・三六八〇）

秋艸道人の奈良旅行は官命による旅ではないが、その鹿鳴の歌には、かうした遣新羅使の歌に一脈かよふものがあるはずである。

秋艸道人における鹿鳴の歌は以上の四首であるが、その

ほかに鹿の歌十首があるので、次にはその私注にとりかか  
ることとする。

さて、鹿の歌十首のうち七首は、『鹿鳴集』の巻頭に  
位置する「春日野にて」九首のなかに集中してゐる。その  
意味においては、「春日野にて」は鹿を主題としてゐると  
も言ふことができよう。

うちふして もの もふ くさ の まくらべ を あ  
した の しか の むれ わたり つつ

これは有名な巻頭秀歌「かすがのにおしてゐるつきの」  
の次に置かれた第二首である。春日野の草を枕にうち伏し  
て遠い物思ひをしてゐると、その枕べを、朝のさはやかな  
空気のなかを、鹿の一群が通りすぎてゆく、と言ふのであ  
る。草を枕に物思ひをして動かぬ人物と、軽快な足どりで  
通りすぎる鹿との対比がおもしろく、「あしたのしか」と  
いふ一句には、すがすがしい生命感が宿つてゐるかと思は  
れる。道人の『渾齋随筆』に「奈良の鹿」といふ一章があ  
り、そこに

『萬葉集』の鹿の歌は、数こそ多い（六十首、山崎注）

が、一つか二つの例外のほかは、いづれも遠方から啼き  
声を聞くといふのが多く、今の吾々がするやうに、ずつ  
と鼻さきに近寄つて、つくづく顔や姿を眺めながら、  
詠んだと思はれるものは、恐らくただの一つもない。  
と述べ、その例外とは左記の二首であるとしてゐる。

夏野ゆく牡鹿の角の束の間も妹が心を忘れて思へや

（巻四・五〇二、人麻呂）

伊夜彦神の麓に今日らもか鹿の伏すらむ皮服かはころも着て角附  
きながら

（巻十六・三八八四）

これに対して道人の鹿の歌には、後続の歌にも見られるや  
うに、生きた鹿の「まなこ」「あぎと」「ねむり」「つのの  
ひびき」「あしたのむれ」などの斬新な着眼点が多く、「か  
うしたものは、近世の吾々の持つ新しい詩材と私は見てゐ  
る」と言ふ。またそこに「古人とは別な見どころがある」  
と言ふ。ここに道人の自負は明らかであり、その自負にそ  
むかない佳作が並んでゐるのである。

つの かる と しか おふ ひと は おほてら の  
むね ふき やぶる かぜ に かも なる

この歌については、すでに親和女子大学の「親和国文」

第二十六号（平成三年十二月）に述べたので、ここでは重複を避けたい。

鹿の角伐りと大寺に吹きつゝの狂風とを結びつけた発想は卓抜であつて、そこには、常にその胸中に奈良の大寺が明滅してゐたはずの、道人らしい表出を見ることができ、

『渾齋隨筆』所収の「自作小註」には「せつかく立派な鹿の角を、無理に切り落すのを、寺の屋根を損める暴風のやうに無分別だといふ気持である」と見える。

こがくれて あらそふ らしき さをしか の つの  
の ひびきによは くだち つつ

夜もかなり明るい現代の奈良とは違つて、明治大正のころの奈良は、電光も乏しい夜を迎へてゐたのであらう。奈良公園のあたりの木下間で牡鹿が角を打ち合ふ。その響きがいつ果てるともないままに、古京の夜は次第にふけてゆくのである。この歌では、前述のやうに「つこのひびき」を捉へたところが斬新であつて、たしかに新しい詩材と言ふことができよう。道人は「つつ」に自註し、

同じ動作の繰返して行はるるに用ゐる。現代語にて継続の意味に用ゐるとは同じからず。

と述べて正確である。この語は前掲の歌にも「むれわたりつつ」とあつたことである。

鹿の角は、いふまでもなく、牡だけのものであるが、角は秋には硬化してゐるから、相搏てば、憂々として響く。静かな夜半には、かなり離れた所からも聞かれる。實際を知らぬ人には、この歌の表現は、かなり誇張された不自然なものに思はれるかもしれぬ。

（『渾齋隨筆』所収「自作小註」）

うらみ わび たち あかしたる さをしか の もゆ  
る まなこに あきのかぜ ふく

この歌についてもすでに別稿（會津八一作歌私注）（親和女子大学「親和国文」第二十六号）に述べたので、努めて重複を避ける。それに先行して小著『萬葉歌人群像』（昭和六十一年、和泉書院）の二〇四ページに笠女郎の歌（君に恋ひいた甚もすべ術なみ奈良山の小松がした下に立ち嘆くかも

（卷四・五九三）

について考へ、會津八一の「うらみわび」の歌を思ふたびに、奈良山における笠女郎の眼差を思ふ、と述べたことがある。これに対して西世古柳平氏は同感の意を示し、

小生もかねてこの八一の歌は、女郎の姿を生なましく描いたものと勝手に決めこみ、愛誦してきました。ひよつとすると八一先生自身「さをしか」と二重映しに笠女郎を見ていたのかもしれませんが。あるいはこの「さをしか」は先生自身だったのかもしれませんが。

と言はれた。溯れば、料治熊太氏にも次のやうな発言がある。私はこの歌は、先生御自身が身をかえりみ、自嘲してうたわれたものと思っています。恋人を得ようと鳴きあかした鹿よ、ついに待ちくたびれて、眼だけらんらんと赤くしているが、吹く秋風も身に沁みることであろう、というのであるが、春日野の鹿に托して御自身の心境をうたったものと思います。

〔短歌〕昭和四十三年十一月号)

前述のやうに、鹿の「もゆるまなこ」は斬新な歌材であつて、この歌はそれを中心とした佳作である。万葉集の乞食者ひびとの歌（巻十六・三八八五）に、さを鹿が「わが目らは真澄の鏡」と言つてゐる。そのすずやかに澄んだ鹿の目は、道人の歌においては赤く燃えてゐたのである。

かすがの の みくさ をり しき ふす しか の  
つ の さへ さやに てる つくよ かも

これは「春日野にて」の第六首である。春日野の草に伏す鹿の姿は、いまも人の目に親しいところである。その鹿の姿を捉へた歌であるが、それが非凡であることは鹿の角といふ一点を際立たせたところにあるべく、またその角を月明のなかに浮びあがらせたところにある。春日野にあられるばかりの月光を、牡鹿の角に集めた秀歌といふべきであらう。万葉集にも鹿の角を詠じた例はあるが、

夏野ゆく牡鹿の角の束の間も妹が心を忘れて思へや

（巻四・五〇二、前掲）

この人麻呂の佳作にしても、まだ短い夏の角を序詞に含んでゐるのであつて、みごとに伸びた秋の角を一首の中心に据ゑて揺るぎなき道人の歌の風格は、鹿の角の歌としては人麻呂に勝るとも劣らずと言ふべきではあるまいか。多用されたサ行音の響きも、歌境に調和して美しい。なほ、この歌については、小著『會津八一の歌』二〇〇ページ以下を参照されたい。

もりかげ の ふち の ふるね に よる しか の  
ねむり しづけき はる の ゆき かな

これは「春日野にて」の第八首である。作者はこの歌に



自註して

春日山のほとりには、杉の古木多く、それに纏<sup>まと</sup>へる藤にも老木多し。

と言ふ。その藤の老木の根に身を寄せて、鹿が眠る。ときをり暇を重たげに開いては、また閉ぢて眠る。鹿のしづかな眠りを乱すこともなく、春の雪がしづかに、音もなく降つてゐるのである。動きもなく音もない世界のなかに、わずかに動くものは淡雪の一ひら一ひらであつた。前掲の歌の結句「てるつくよかも」に対して、この歌の結句は「はるのゆきかな」である。この「かも」と「かな」の相違は重大であらう。すなはち、この両者は置きかへることができないのである。この歌に存するしづかな、やはらかな味はひは、末尾の「かな」によつて完成されてゐる。かつて吉野秀雄は道人の作

むさしの の くさ に とはしる むらさめ の い  
や しくしくに くるる あき かな  
の「かな」について次のやうに述べた。

「かな」のやはらかな味がこんなに生きたことはめつたにないのではなからうかとさへおもふ。幸田露伴は「かたぶくまでのつきをみしかな」のカナが古今を絶した立派なカナだといったが、わたしはそれに同感すると共に、

道人のこの歌のカナも絶品の一つだと信じてゐる。

(吉野秀雄全集第三卷二三〇ページ)

吉野秀雄の『鹿鳴集歌解』には「はるのゆきかな」に格別の言及をしてゐないが、これもまた絶品の一つに相違ない。春の淡雪は「ふぢのふるね」のあたりにはまでは迫ることがない。そこに身を寄せる鹿の眠りを捉へた秀歌と言つてよからう。

昭和二十九年一月五日の日記に、道人は次のやうに記した。午後六時半、杉本健吉『春日野』の画稿を携へて東京より来る。そのうちから批評選択して一枚のほか決定。

予もまた一枚書き直すこととす。杉本一泊。杉本の絵は数年を隔つるのみにて目立ちて進境を示せり。

その『春日野』は道人の歌と書に杉本健吉氏の絵を併せた豪華集で、同年八月に文藝春秋社から刊行された。そこに含まれる二十首のうちに、この「もりかげの」の一首がある。限定三百五十部は忽ちに売切れ、昭和五十三年十一月に復刻版の初版が出てからも版を重ねた。宮川寅雄による解説には右の日記を引いてゐるが、時刻を誤つて「午後六時」とし、「杉本一泊」を省いてゐる。

をぐさ はむ しか の あぎと の やみ なく

ながるる つきひ とどめ かねつ も

これは「春日野にて」九首の末尾の歌である。第二句までが序詞で「をやみなく」を導いてゐる。その序詞に鹿が見え、その鹿の「あぎと」の動きを捉へたところに注目すべき歌である。まさに作者みづから「新しい詩材」としたところであり、新鮮な着眼点と言ふことができよう。その鹿の「あぎと」の動きがをやみなき如く、をやみなく流れ去る月日をとどめがたいといふ歎きが詠まれてゐる。時は一瞬もとどまることなく過ぎて、古代はいよいよますます遠く去つてゆく。同じく「春日野にて」の第七首に

かすがの に ふれる しらゆき あす の ごと け  
ぬ べく われ は いにしへ おもほゆ

といふ歌があり、その自註に「われも消え入らんばかりの心にて、上代のことを思ふといふなり」と述べてゐるのであつて、その上代から刻一刻と遠ざかるふかい歎きは、「しかのあぎと」に湧いて止まないものであつた。この歌の自註には

上下の顎を左右にゆるく噛み合せて草を食ふ。その顎の暫くも止まざる如く、歳月は流れ去るといふに思ひ合せて詠めり。

『万葉集』の歌人は獣の同じ習性を「春の野に草食<sup>は</sup>む 駒の口やまず吾<sup>わ</sup>を忍ぶらむ家の子ろはも」など云へり。と述べてゐる。この万葉歌は卷十四、三五三二番の東歌で、第四句「忍ぶ」は「偲ふ」（活用語尾は濁音ではなく清音である）が正しい。

以上の七首が「春日野にて」九首に見られる鹿の歌である。これは大正十三年（一九二四）刊の『南京新唱』においては「春日野」と題され、その歌数が八首であつたのであるが、昭和十五年（一九四〇）に刊行された『鹿鳴集』においては題を「春日野にて」と改め、末尾に「をぐさはむ」の一首を加へて歌数を九首とした。昭和二十八年（一九五三）に刊行された『自註鹿鳴集』においては、第二首「かすがのの みくさをりしき」を第六首に移したのであるが、全集においてもとの配列に戻つてゐる。本稿はしばらく『自註鹿鳴集』の配列に従つた。これが道人の最終的な意図であつたと考へられるからである。

しかのこはみみのわたげもふくよかに  
ねむるよながきころはきにけり

これは『南京新唱』に見えず、『鹿鳴集』初印本にも見えない歌であるが、昭和二十六年三月に刊行された『會津八一全歌集』に至つて登場した。すなはち、道人は『南京新唱』における「放浪唸草」の原形三十三首に、『鹿鳴集』において四首を加へ、さらに『會津八一全歌集』においてこの歌を含む二十六首を加へて、最終的には「放浪唸草」を六十三首の大歌群としたのである。その大歌群の第六十首がこの歌であり、その形が『自註鹿鳴集』にも『會津八一全集』にも継承されてゐる。

道人の「放浪唸草」の旅は、大正十年十一月十六日に東京を出発し、十二月二十九日に大阪に帰着するまでの西海道巡行であつた。その旅情を詠じた大歌群は五十九首で終り、あとの四首は謂はば余録であつて、翌年一月二日に奈良に向いたときの詠草となつてゐる。すなはち、この歌は「西国の旅より奈良にもどりて」といふ詞書のもとにある。道人はこの夜、日吉館に泊つた。

これは一言を以てすれば、慈愛温雅の一首である。自註に「ふさふさとしたる綿毛を、その耳の内側に持てる鹿の子」と言ふ。その鹿の子が親のかたはらに眠る夜も長いと言ふのである。かくて奈良の早春の情感は、新しい詩材、鹿の子の耳の綿毛をめぐつて、あさあさと立つのであつた。

この歌の情感は二十余年ののちにしづかな響きを立てる。それについては、また後に述べる。

かすがの の しか ふす くさ の かたよりに  
わが こふ らく は とほつ よ の ひと

道人はこの歌に自註して「鹿の伏したる跡は、草は一方に片靡きて折れ伏す。その如く、わが心は、ひたすらに傾きて、古人を思慕すといふなり」と述べ、万葉集における「かたよりに」の用例を示してゐる。これによつて歌意は明らかであらう。第二句までが序詞であり、その序詞のなかに春日野の鹿が詠みこまれてゐるのである。さきにも示した歌であるが、「南京新唱」の「春日野にて」にかすがの に ふれる しらゆき あす の ごと けぬ べく われ は いにしへ おもほゆとあり、これに対してこの「かすがのの しかふすくさの」の歌は「南京余唱」（大正十四年）にあつて、同一の詞書「春日野にて」のもとにあり、同様に古代に寄せるふかい思慕を詠じてゐる。この歌における「しかふすくさ」も新しい詩材であり、それが「かたよりに」以下を導く呼吸、感性は非凡であると思ふ。

以上の十三首はすべて『鹿鳴集』に含まれてゐたが、道人の鹿の歌は、第二歌集『山光集』にもなほ一首を見ることができる。これについても一言して、本稿を閉ぢることとしたい。すなはち「鐘樓」（昭和十八年三月）六首の第六首である。

さをしか の みみの わたげ に きこえ こぬ  
かね を ひさしみ こひ つつ か あらむ

前掲の「みみのわたげも ふくよかに」の歌は、大正十一年一月の作であつたが、これは昭和十八年三月の作であつて、二十余年を隔てて「みみのわたげ」はふたたび登場したのである。若き日の大伴家持は万葉集に

さを鹿の胸分むなわけにかも秋萩の散りすぎにける盛りかも去ぬ  
る  
(巻八・一五九九)

と詠んだ。これは天平十五年（七四三）秋八月、家持二十六歳の作である。これに対して天平勝宝六年（七五四）秋の歌に

大夫まふの呼び立てしかばさを鹿の胸分むなわけけゆかむ秋野萩原

(巻二十・四三二〇)

とあつて、家持三十七歳の作である。この余人に例を見な

い詩語「さを鹿の胸分」は、家持において十余年を隔てふたたび登場したのであつた。遠い日に得てみづからよしとした詩語を、後年に及んでふたたび用ゐるといふことが、家持の「さを鹿の胸分」と道人の鹿の「みみのわたげ」との間に共通に見られるといふことは、歌人と詩語との関係における重要な問題を示してゐるのであらう。前述の「まちのちまた」は大正十二年の「震余」に「あたらしきまちのちまたに」とあり、大正十四年の「南京余唱」に「まちのちまたを なきわたりゆく」とあつたのであるが、それから二十余年を経て、昭和二十二年十一月の「伐柳」にも「まちのちまたの たそがるるころ」と三たびにわたつて詠みこまれてゐる。

昭和十八年三月、道人は東大寺における聖武天皇詔勅千二百年の大法要に参列して、力作「大佛讚歌」十首を献じ、次いで「鐘樓」六首を詠じた。をりしも戦時下にあつて、みだりに鐘を鳴らさぬやう、撞木には繩が巻かれてゐたのである。鹿もまた久しく響かぬ鐘の音を恋しく思つてゐるのだらうか、と言ふ。かつてわたくしは「鐘の音に寄せる作者自身の思ひが無理なく鹿に投影され、秀抜な第二句を中心とした一首の調べは、鳴らざる鐘も鳴るかのやうな印象を覚えしめる」と述べたことがある。小著『會津八一の

歌』二〇七ページ以下を参照されたい。

秋艸道人會津八一の鹿鳴の歌四首、鹿の歌十首は、かくてさまざまに新しい詩語をちりばめながら、『鹿鳴集』『山光集』に遺されたのであつた。

(補注)

『會津八一全集』第四卷(昭和五十七年三月)には「全歌集拾遺」として二百六十五首が収載されてゐる。そのなかに含まれた鹿の歌五首および都々逸一首を掲げておく。

おほほしくひとり立ちたるさをしかのまなこにうつる春日野のゆき

をじかなく寒き夕もしきたへの家はおもはずみほとけをおもへをじかなく奈良のやどりにきみをおきてあづまのかたにいむかふわれは

かすがのや佛づかれの身をふせていこへる芝を鹿のすぎゆくいにしへにものみなかへれかすが野に鹿のかてうる人の日傘も鹿になりたや わかくさやまの つゆにまる寝の こひ衣

この全集第四巻には松下英麿による綿密な編集後記があり、そこに「全歌集拾遺」について次のやうに述べてゐる。

この拾遺は著者が生前六部(南京新唱、南京余唱、鹿鳴集、山光集、寒燈集、全歌集の六部をさす、山崎注)の家集を編む際に、思うところあつて自ら廃棄した作品群である。

従つて、この拾遺を會津八一作歌の数に加へることは不適當であ

る。それは「著者の歌歴を尋ねるうえに缺くべからざる重要性をもっている」(松下)が、道人の歌としてはその大部分が質の低さを示してゐることは、右に見られるとほりである。道人の全歌数は、全集に載せる八百八十六首であり、これを「著者の鑑撰を得た」(松下)作品の総数と言ふべきであらう。これに「全歌集拾遺」から佳作、たとへば相聞歌三首

わざもこをままれみほとけくさまくら旅なるあれがやすいしぬ  
べく (明治三十九年)

信濃なるあさまが岳に煙立ち燃ゆる心は我妹子の爲め

うつせみはうつろふらしもまぼろしにあひみるすがたとはをと  
めにて (明治四十年)

などの十首ばかりを拾つて加へるとしても、総歌数は九百が限度なのである。別稿にも述べたやうに、道人はこの九百首のなかから

ただ二三十首を擇びて別に一小冊子を成し、これを以て長く  
来者に問ふ(全歌集序)

ことを願つた。しかもその人は「今日、第一級の歌人として、だれの眼にも疑いのない存在とされている」(宮川寅雄『自註鹿鳴集』解説)のである。